

第 25 回首都圏政策研究会 要旨

日時：平成 26 年 2 月 28 日（金）15：00～16：30

会場：横浜ベイクォーター内 ザ クラシカベイリゾート 6 F 会議室

講師：亀井 信幸氏（亀井工業ホールディングス代表取締役社長）

テーマ：「ローカルファーストが日本を変える」

あいさつ（松沢代表理事）

本日は「ローカルファースト」がテーマ。亀井先生は高校時代からの同級生であり、神奈川県知事時代にも全面的に支えて頂いた。現在は、地元・茅ヶ崎で事業家として会社を経営しながら、地域におけるボランティア活動にもご尽力されている。本日の講演では、「ローカルファースト」の哲学をご開陳いただき、私たちが企業活動、地域活動を行っていく上でのご示唆を頂ければと思う。

I ご講演

1、はじめに

- ・「ローカルファースト」という言葉は、何となく聞いたことがありそうだが、実は意外と知られていない。加えて説明も難しい。そこで今回 1 冊の本にまとめて出版をした。
- ・本日は、ローカルファーストの素晴らしさや可能性に気づいていただき、皆さん自身でそれを掘り下げていって頂ければ嬉しい。

2、自己紹介（亀井工業ホールディングスについて）

- ・茅ヶ崎で創業し今年で 123 年。総合生活企業。
- ・元は土木建築業から出発したが、先代がいつも考えていたのは「地域に何が必要かを考え、地域に必要な仕事をしていこう」ということ。それが一つずつ増えていき、事業を展開していった結果、現在の 6 つの柱になった。

3、ローカルファーストという言葉について

- ・よく「ローカルファースト」の定義について質問されるが、私自身はあまり定義付けをしたくない。ローカルファーストは、あくまで自己の気づきの問題であり、それぞれの価値観、解釈、活用があって良いと思う。
- ・今、世の中は行き詰まり感がある。様々な課題の中でも特に問題なのが高齢社会。そういった課題を解決していく上でのキーワードが「ローカルファースト」であり、この言葉は、様々な社会課題に対して答えを導き出してくれる可能性に富んだものである。
- ・言葉は思考であり、思考が行動を生み出す。社会経済は一人ひとりの思考と行動の積み重ねの結果であると思う。「ローカルファースト」という言葉は、経済的にも、そして人生の豊かさという意味でも重要ではないだろうか。
- ・言葉が社会を変えることもある。私は「ローカルファースト」の価値観を持った人を一人でも増やしたい。言葉が力を持って社会を変えられたら、日本はきっと明るくなると思う。

4、ローカルファーストという言葉との出会い

- ・40歳で青年会議所の活動を引退した後、「まちづくり研究会」を設置したのがきっかけ。
- ・その中で、木造建築、まちづくりの第一人者である東海大学・杉本洋文教授との出会いがあった。
- ・湘南地域が参考になるのはアメリカ西海岸。そこで、オレゴン州・ポートランドへ視察旅行に行った。この視察旅行が「ローカルファースト」に気づき、議論を始める大きな契機となった。

5、アメリカのローカルファースト運動

- ・ポートランドは循環型の持続可能な街になっている。
- ・ポートランドに行って、コンビニがない街であることに気づいた。市民の地域のひとりひとりが「ローカルファースト」という価値観を持って生活をしており、ローカルファーストな生活スタイルが身に付いているようだ。
- ・地元のスーパーマーケットは徹底的に地域（学校、地域のサークル）との共存共栄を図っており、地域との連携が密である。
- ・レストランにも多くのこだわりがあり、レストランからも街が変わっていくということを学んだ。そして多くの「気づき」を得ることができた。

6、コンビニエンスストアについて

- ・パン屋でパンを買うか、コンビニでパンを買うか。地元で買うと、作っている人の顔も分かり、材料も分かり、季節感もある。日々顔を合わせるからこそフェイストゥフェイスのつながりができる。街の顔はそんな一つ一つのお店の積み重ね。
- ・コンビニの食品の味は研究されていて美味しいし、はずれがない。しかし、全国どこにいても味は同じであり、街の個性を均一化させるという弊害がある。
- ・アメリカでセブンイレブンがあまり上手くいかなかったのは、システムのせいではない。アメリカは「生産性」と「ローカルファースト」をうまく使い分けているからだ。

7、イタリアのロー運動

- ・キャッチは「ファーストフードからスローフードへ」。
- ・イタリアも戦後、都市部への集中化が急激に進み、地域は過疎化した。しかし、1980年ごろからアグリツーリズム、地域の資源を活かした中でのまちづくりをするようになり、地域に人が戻りつつある。

8、本当の豊かさとは何か

- ・茅ヶ崎の魚屋の話。茅ヶ崎ではみんなスーパーで買うようになったので、実は地元の魚は買えない。魚が減れば市場が回らず、地元の漁師さんが少なくなる。
- ・昔は季節感があり、自然がその日の献立を決めていた。ただ、茅ヶ崎市民はそれを選択しなかった。一人ひとりが「ローカルファースト」の気持ちを持っていれば漁も回る。

- ・地元でできることは、まず地元でやる。地元でできないことは他の地域や中央の力を借りる。これが基本である。

9、ローカルファーストが人々の意識に働きかける

- ・地域の活性化は、制度などの技術論だけでは解決できないところにもどかしさがある。
- ・中心市街地活性化法などのまちづくり三法で様々な取り組みがなされているが、なかなか上手くいっていないのが現状。
- ・政治の中にも「ローカルファースト」の考えが必要。自分たちの地域が良くなればそれで良いのだというのではなく、お互いがお互いの地域を大切にすること。これも立派な「ローカルファースト」。

10、超高齢社会を迎えるにあたって

- ・これからの超高齢社会を幸せに生き抜いていくためには、私はこの地域に生きているのだ、自分たちの手で地域と暮らしをつくっていくのだという、「ローカルファースト」の気持ちが必要。
- ・豊かな高齢社会を作っていくためには、地域とのつながりはなくてはならない。一人ひとりの「ローカルファースト」という価値観による思考が、新しい高齢社会、地域経済を作っていくだろう。

11、最後に

- ・私は「ローカルファースト」という言葉を、地域を基盤に地域の創造に取り組む全国の経営者たちと共有したい。共有することで、行政、市民と手を取り合って明日の地域を創造していきたい。
- ・この「ローカルファースト運動」は少しずつ広まってきており、今後も広げていきたいと思う。参加者の皆さんにはこのローカルファーストという言葉の良さを感じていただき、一人ひとりが広めていっていただければと思う。私自身も大切に育てていきたい。

II 質疑応答

Q：自身、NPOを設立し、湘南地域全体のまちづくりの在り方を研究しているが、

①亀井先生は「ローカル」という言葉をどのように捉えているか。

②私は、地域のまちづくりにはどんどん民間企業が入っていくべきだと考えているが、今後の亀井工業の事業展開・展望をきかせて頂きたい。

A：①1 f という言葉に「エリア」はない。どこにいても、どこでも、一人ひとりの行動、自分に何ができるかを考えて行動していくことが大切。したがって、一人でも多くの方とローカルファーストという価値観を共有していきたい。

②「地域に必要な仕事」をしていく。もちろんグローバルな社会なので世界情勢に左右される部分はあるが、より地域に密着した仕事をしていけば、世界情勢に左右されにくい。

今は福祉事業に力を入れており、今後の超高齢社会にどう対応していくか、何ができるかを行政とも連携しながら真剣に考えているところである。

以上